

---

# 大海の星戦

ハワード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大海の星戦

### 【Nコード】

N2549I

### 【作者名】

ハワード

### 【あらすじ】

人類には未だ解明できないものがはつきりと一つある。

それは、永遠なる未知の領域であり、この先も人類が滅ばうとも解明はできない。

では何か？・・・・宇宙(space)・・・・人類の英知を結集した高性能望遠鏡ですら、太陽系以上を捕らえることは出来ていない。

私がこれから語る、未来と言われる遙か先で起きた出来事を話そう。

## 新たな歴史の始まり

ある場所の一室

「司令、偵察部隊からの報告です。」

司令と言われた人物の机に報告書が置かれる

「うむ……」

報告書を手に取り内容を確認しながら、目の前の人物に質問をぶつける。

「黒田君、報告書によると惑星アルテミスに少数ながら敵の艦隊が接近しつつあるようだね」

黒田と言われた人物が答える

「はい、約2000隻程度の少数の艦隊が現れました。」

手元のリモコンを操作してモニターを出現させた

「商星二級惑星アルテミスから約六万宇宙キロメートル離れた隕石郡、通称ツエーラに王政連合軍方面艦隊からの強行偵察艦隊と思われる。」

その回答にさらに質問する

「今頃に強行偵察？確か近年に起きた盟主アルバート四世の老死で連合に少なからず動揺が起き、混乱の最中ではなかったかな？」

どうやら黒田は副官のようだ

「はい、アルバート四世の老死で混乱していたようですが……」

「ですが……」

「どうやら、アルバート四世の実子、ミハイルが後継者となり鎮めているようです。」

「ミハイル？確かアルバートの長男はカールではなかったかね」

あごを触りながら

「おっしやっているように長男はカールですが、彼はアルバートの実妹の忘れ形見なのです。」

「つまり、直系でもないしアルバートの血が流れていないため継承権から手を引いたということか・・・。」

「そのようです。また、有力候補のアルバートの三男ディーンは、ミハイルに協力したことで迅速に抑えたようです。」

司令と言われた人物が少し驚きながら

「ディーンが！？、奴は確か盟主の座を狙っていなかったかね？」

納得しながら黒田が答える

「はい、確かにディーンは狙っていましたが、アルバートの遺言で自身の死後の連合軍の総参謀長を任せることを明記されていたようです。」

司令も納得したようで話す

「なるほど、結果アルバートの実子は二人だけだから、片方が要職に就くと、後継者はもう一人に確定するな・・・。」

二人が話していると通信アラームが鳴る

それに司令が応答した

「なんだね？」

通信の相手は部下のようだ

「司令！大変です。王政連合軍と思われる大艦隊がバミューダ宙域に出現！！」

司令は驚愕しながら叫ぶ

「なんだと！？総数は敵艦隊の識別は！？」

部下が答える

「敵艦総数は8万隻！識別によりますと敵艦隊は四個艦隊、第一、第二、第五、第六艦隊と思われます！！」

画像が添付され、各艦隊の旗艦が映し出されている

副官の黒田が冷静に話す

「第一艦隊旗艦<ビスマルク>、第二艦隊旗艦<テイルピッツ>、第五艦隊旗艦<ドイツチュラント>、第六艦隊旗艦<アドミラル・シエーア>の四隻が確認できますね。」

悩みながら司令が話す

「なんてことだ！、情報局の話だと侵攻または侵略されるのは来年以降と言っていたではないか！」

憤慨しながら

「仕方がない、艦橋に向かう」

通信の相手に言う

「はっ！」

通信が切れた後、司令は副官を見ながら

「君も行くかね？」

出口に向かいながら

「はい、東郷提督」

東郷と言われた司令の後に副官の黒田が続く

新たな歴史の始まり（後書き）

第二部へ続く・・・

## 混乱の戦場

「東郷司令入室！」

艦橋の出入り口を警戒する歩哨が東郷に気づき敬礼をしながら叫ぶ。それに連なつて、通信やレーダーを操作する要員以外は立ち止まり、東郷に敬礼する。

それを見た東郷は敬礼で返し

「休め！、副司令に参謀長、艦長を上頼む」

「はっ！」

用件を受けた隊員が敬礼をして足早に移動する

東郷と黒田は士官が来るまでに艦橋の司令官の席後方、艦橋の一番奥に作られたオープン作戦協議スペースに移る

「よいしょ」

東郷は左右に席を設けたテーブルの中心上に作られた自分の席に座る  
副官の黒田はその後方に待機する

そして、ざわざわした声が近づいてくる

おのおの、各指定されていた席に着席したところで

「やあみんな、こんな忙しい時間帯に集めてすまない。」

副司令が返答する

「いえいえ、こちらは突如現れた敵艦隊の影響で混乱していましたから、ぜひとも司令の指示が欲しかったですよ・・・」

やや疲れた様子で話す生真面目そうな人物が喋る

「わが地球民主連合軍で、敵艦隊に一番近いまともな艦隊は我々と第四艦隊ぐらいですかね」

先ほどの人物とは違う穏やかな笑顔の人物が喋る

「確かに、合流しても四万隻・・・司令、本国にいる艦隊はここま

で来るのに十日はかかります。かなり厳しいのでは？」

腰まで伸びる長い黒髪をなびかせる女性が判断を司令に尋ねる

三人の報告や意見に悩む東郷が語りだす

「正直、策は今のところないね・・・」

その言葉で場の空気が重くなる

先ほどの生真面目そうな人物が

「し、司令！、策がなければ我々は全滅です・・・」

神妙な顔つきで焦る

「エドワード艦長？我々は全滅するぐらいならアルテミスぐらい王政連合軍に差し出して、本国艦隊と合流します。」

生真面目そうな人物にエドワード艦長と言い、自分の意見を言う。

黒髪の女性

「おいおい、アリス副司令？例え軍事的価値のない二級商星でも政治や経済的には痛手だと思うがね。」

黒髪の女性の発言に困る穏やかな人物

「リーゲン参謀長、我々の艦隊が壊滅しては元も子もないと思いますが？」

指摘されたことについて反論するアリス

「アリスの意見は最終行動にしよう・・・、どちらの意見ももつともな意見ですからね・・・」

あわてて事態を收拾するエドワード、その時

「奇襲はだめですか？」

副官の黒田が一声をあげ、提案する

「いいですね。彼女の意見に賛同します。私は元々奇襲部隊の指揮

官でしたから」

アリスが賛同する。さらに、黒田は女性だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2549i/>

---

大海の星戦

2010年10月10日03時32分発行